

連載

「落書き的論文」のすすめ（上）

現代日本の学問意識をめぐって

小島 潔

はじめに

昨年（2020年）10月、日本学術会議が、三年に一度の会員半数改選期にあたり、105名の会員候補者の推薦名簿を政府に提出したところ、その中の6名が首相によって任命を拒否されるという異例の事態が明らかになった。これは、6名の学者が過去に政府の政策を批判したことが理由であったことは明かで、そこから、憲法に保障された「学問の自由」への侵害であるとか、戦前の学問弾圧にも等しい蛮行であるとか、ファシズム的な言論統制への一里塚である、などと、マスコミで大騒ぎになったことは記憶に新しい。

首相による任命拒否が、直ちに「学問の自由」の侵害や言論弾圧にあたるかどうかはともかく、学術会議と政府との間で長年守られてきたルールを、時の政権が一方的に破棄したのが「暴挙」であることは言うまでもない。またそれによって、政府が学術会議を自らの風下に立つ従属的な組織であるとみなしていることを満天下にさらしたことも間違いない。このような学問や学者に対する蔑視がいずれ「学問の自由」の圧殺につながることも十分に考えておかなければならないだろう。

しかし、この事件で私が最も注目したのは、首相の知的レベルの低さでも、ルールを平気で無視する政権の強権体質でもない。このような「暴挙」に対して、学術会議がまとまって抗議の声を挙げることがほとんどなく、執行部任せの「紳士的対応」に終始したこともさることながら、なによりマスコミが「学問の自由」の侵害だとあれほど騒ぎ、多くの識者も憂慮を表明したにもかかわらず、この問題にたいして国民がほとんど無関心だったという事実である。菅首相が、自らの行為について、「国民の代表者」としてチェックするのは当然のことだと開き直ったのは、まさに「学問の自由」に対する国民のこの無関心・無感覚を折り込んでの発言だったのである。

国民のこのような無関心・無感覚の底には、「学問の自由」は「研究」を生業とする研究者には大切な権利かもしれないが、自分たち一般国民には関係がない、という意識が広く浸透していることを表しているように思われる。あるいはもっと言えば、そもそも「学問」なるものはもはや自分たちには不要なものだ、それがなくてもなにも困らない、という意識が、国民の常識と化してしまっているのではないか、とさえ思われるのである。

このような国民の無関心はいずれ、首相があからさまに示したような学問の蔑視へと深まっていくだろう。しかもさらに悪いことは、この学問の蔑視が、今や日本社会に蔓延する「専門家」依存と手を携えて進行しているように見えることである。「社会のあらゆる問題に、「専門家」と称される人たちが出てきて、彼らが直ちに答えを出してくれると信じられているようなのである。

そうだとすれば、いま必要なことは、学問は日常生活にこんなに役に立っているというような実利性を大急ぎで強調して、国民と学問とを無理やり架橋することではあるまい。むしろ、今日の日本社会において学問とは何か、学問研究と社会との関係はどうあるべきか、私たちの生に対して学問がもつ意味は何か、といったことを、原理的に反省することではないだろうか。そうしなければ、人文科学・社会科学の専門化・技術化は国民の気づかないうちにとめどなく進行して、国民にとっていよいよ無意味なものとなるか、さもなければ、意図するとしなにかかわらず、国民意識の強力な操作技術・麻醉技術として機能することになるのではないかと、私は危惧するのである。

戦後のある時期まで、学問論は日本社会の重要なテーマであった。それは何より、敗戦によって露わになった日本社会の課題——近代化や民主化、非軍事化といった全社会的な課題を遂行するためには、歴史科学や社会科学の革新、あるいは新たな創造

が不可欠であることが、国民的規模で認識されたからにはほかならない。それが、マルクス学やウェーバー学を中心に、日本の近代史上かつてない創造的かつ豊かな社会科学やその方法論を、学問論として開花させたのである。

ところが、そのような状況の中であって、戦後の代表的知識人であった上原専禄という歴史家は、学問研究の社会的意味や社会的基盤の問題について、戦後の社会科学や学問論を牽引した学者たちとは異なるスタンスを取っていた。彼は戦後の「学問隆盛」の状況にもかかわらず、それを真の学問精神の興隆とも、社会と学問とのありうべき関係を実現したものとも考えなかった。すでに1950年代から批判を重ね、とくに1960年代に入ってから、出版産業とともに学問もまた「高度成長」ととげて、国民の切実な現実課題から遊離していったことに強い危惧を表明し、抵抗し続けたのである。

現代の日本の学問意識を主題とする本稿が、今日では知る人も少なくなった上原専禄という歴史家に焦点を当てるのは、まさに彼のスタンスのこのような独自性に基づく。彼は、今日あらわとなった国民の学問への無関心や無感覚を、戦後の「学問隆盛」の状況の中にいち早くキャッチし、それを問題にし続けた存在だった。本稿はこのような上原の学問意識の形成と展開をたどることを通して、今日の日本社会における学問の意味、学問と社会とのありうべき関係、さらには私たちの生にとって学問がもつ意味を考えるための、示唆を得ようとする試

みである。

ある留学精神史——「大学生に落ちぶれて」

上原専禄（1899 - 1975）は、戦後の学問を牽引した学者たちより年長で、敗戦時にはすでにヨーロッパ中世史の傑出した研究者として、学界の中に揺るぎない地位を築いていた。つまり彼の学問経験は戦争の試練をくぐっていたということである。その点で、学問経験が戦後経験とほとんど重なる戦後学問の旗手たちとは異なっていた。

こうしたことから私は、上原の学問意識の形成を、1945年の敗戦以前と以後とに大きく分けることができると考える。そしてその前半期において決定的な意味を持ったのが、彼の留学体験（1923—1926）であったことから、本稿をまずその検討から始めたい。それは、同時期にヨーロッパに向った多くの留学生たちのそれとはおよそ異質なものであり、その異質さが、彼の戦後における学問論の独自性の基盤のひとつをなしたからである。

上原は1916年に東京高等商業学校（1920年に東京商科大学に昇格、1949年に一橋大学となる）に入学、本科修了後の1919年に専攻部に進み、そこで歴史家三浦新七に師事する。

三浦は1902年に、商業研究のために3年間のイギリス・ドイツ留学を命じられたが、最初の留学地ライプツヒ大学で歴史家ランプレヒトに出会うや、そのもとで歴史研究に志すに至り、度重なる文部省から

の帰国督促も無視して、1911年末までランプレヒトの下で研究をつづけ、ランプレヒトの主宰する「文化史並びに普遍史研究所」において、助手として彼を助けた⁽¹⁾。

九年余に及ぶ留学から帰国すると、三浦は母校の東京高等商業学校（高商）で商業史・経済史の講義を行い、高商が大学に昇格する前年の1919年からは、自らの独創になる「文明史」を講じ始めた。

上原の方は、1916年の高商入学後、「勝手に好きなことがやっておれる」学園の雰囲気のもとで、河上肇の影響で貧乏研究（都市貧民窟の探訪）を始めたり、吉野作造・福田徳三らを通して大正デモクラシー運動に関心をもったり、社会主義やマルクス主義の文献に親しんだり、宗教運動に接近したり、『白樺』の忠実な読者になったりと、「大正末期という時代に若い者がもつ、ほとんどすべて」の方面に知的関心を伸ばしていったが、やがてそれは彼の内部に諸価値の乱立状況をもたらし、そこにまとまりをつける必要を強く感じるようになる。その時、専攻科において指導を受けていた三浦から、次のように言われるのである。「それが歴史というものだ」と。「歴史というものは諸価値の体系みたいなものである、諸価値がそれぞれに位置を持っている、その全体の全体系をつかむこと、それが歴史の勉強というものなのだ」(18 19-20 頁)⁽²⁾ということを学ぶのである。この「諸価値の体系」としての歴史という考えを知ったことは、上原にとって、学問意識と呼べるものとの重要な出会いの一つであったことは間違いない。

一方、三浦のゼミナールでは、ランプレヒトの『近代歴史学』や『歴史的思考入門』を全員で読んだが、上原だけはそれに加えて「私の研究用にと貸与されたフィヒテとアダム・ミュラー」を読み、「両者を通じて読書に方法があり、作法があることを私は感得することができた」。つまり学問の方法としての「読書」への開眼があったというのである。

また、三浦がランプレヒトのもとより帰ってから10年、満を持して開講した「文明史」の講義から得た感銘というものにも注目したい。「〔商大の〕他の諸学科との関連とか、学生の聴講能力とか、学説の如何とか、そういうことには一切無頓着に、只どうすればその時々の講義対象を直ちに自己のものにすることが可能であろうか、どうすれば対象を自己の方法で消化することが可能であろうかに苦心せられているように見受けられ、その独往の学問態度にいたく打たれると同時に、聴講の最中は一種の法悦を感じ」と、上原は回顧している（⑤251頁）。「文明史」は三浦のまったくオリジナルな独壇場であり、学生を前にしての「苦闘」は、そのまま学問創造の現場となり、それを眼前に見た上原に、学問することの苦しみと喜び（「法悦」！）をあらためて思い知らせることになったのである。

三浦の指導のもとで与えられたこのような学問意識は、しかし大きく転回することになる。それがウィーン大学への留学であった。

戦前日本の文部省による留学生派遣は

1875年から始まり、1940年に戦争で中断されるまで、65年間にわたって実施され続けた^③。この65年間は四期に分けることができる。第一期は1875年から1890年代の中ごろまで。帝国大学の教員にするために文部省主導で留学生が選定・派遣された時期である。第二期は1900年前後から1918年まで。選抜方法が文部省主導から大学主導に変わり、帝国大学が学内選考を経て推薦者を文部省に上申し、そのリストの上位者から派遣された。第三期は、1919年から29年までの十年間。高等学校等の高等教育機関が大幅に拡充され、留学生も毎年百人を超えた。この時期の特徴は、各高等教育機関が、自校教員の充実のために、既に教職にある者を派遣するというのが主流になったことである。この時に制度名が「文部省外国留学生」から「文部省在外研究員」へと変えられたが、それは、派遣された者が「既に内地に於て相当の地位を占め相当の研究を積みたる」者が主流となり（年齢も概して高かった）、「外国留学生といふが如き名称は当を得ざること」になったからである。同時にその背後には、「真正ノ学問ハ日本ニテ充分発達セシムルコト」ができるという見通しがあり、したがって「留学ノ主眼ハ大体見聞ヲ広ムルコト」にあるという認識転換があった。極端に言えば、留学は第三期に入って一種の「物見遊山」として公認されたということである。

第二期から第三期にかけての時期に留学制度がどのように受け取られていたかを如実に示す資料が残されている。第二期の後半、1913年から1915年にかけてヨーロッ

パに留学した河上肇の『西欧紀行 祖国を顧みて』である。出発時、河上はすでに34歳、京都帝国大学助教授の地位にあった。滞欧中の通信文を帰国後にまとめた同書の中で、河上は海外留学制度について、自己の経験に照らして、学者（恐らく文科系）の海外留学はもはや無用であると論じた。第一に、今日世界中の新刊著作や雑誌には国内の大学図書館で自由に接しうること、第二に、海外諸大学の教授の講義は簡単なもので、はるかに詳しいことを自著に書いているので、外国語を聴くのが苦手な日本の学者は、国内で彼らの著書を読むほうが効率的であること、第三に、今日の留学生は大学助教授クラスの者が多く、西洋にきたからといって「大学生に落ちぶれて、入学料や聴講料を支払い、インキ壺を下げて通学するなどいう事は、実は日本の学界の恥辱」である、というのがその主な理由であった（同書「文部省留学生」）。

もっとも河上は、「洋行」の有用性は認めていた。「私ども社会現象を取扱っている学究には、一度西洋に渡って、自分の眼で西洋人を観、西洋の文明を視る必要があります」。しかしそれは学問修業のためではなく、「見聞ヲ広ムル」ためであったから、「一カ年乃至一カ年半の巡回旅行で沢山」であった⁽⁴⁾。

海外留学についてこのような認識が形成されていた状況の中に、上原の留学を置いてみると、どうであろうか。

1922年、まだ大学生の身で「在外研究員候補」となり、翌年卒業するやいなやウィーンに旅立った上原の留学は、言うまでもな

く第三期に属する。しかし彼はまだ、「内地に於て相当の地位を占め」てもおらず、三浦から一人だけ特別の指導を受けていたにしても、「相当の研究を積」んでいたわけでもない。にもかかわらず、異例ともいえる早期の留学が決まったことは、三浦の強力な推挽によるものであったと当然考えられるのであり、三浦の上原に対する並々ならぬ期待をうかがわせるものであった。

すでに留学生派遣は各大学が主導権を持っていたので、上原もまた、ヨーロッパのどの大学へ、何を、どんな形で学びに行くかについては、すべて三浦との相対で決めればよかった。上原は三浦に質問する。「ヨーロッパで偉い歴史家と申すと誰れでしょう」。ヨーロッパで偉い歴史家に就きたいというのが、上原の単純素朴な希望であった。そこには、近代歴史学を真に学ぼうと思うならば、日本ではなく、それが創り出されたヨーロッパに行かねばならないという、河上が示したのとはまったく逆の認識があった。それは、九年間ランプレヒトのもとで鍛えられた三浦から上原に受け継がれたヨーロッパの学問に対する認識であったと考えてよい。

三浦の答えはこうであった。「偉い歴史家なぞはいないよ。出来るのは先ずドープシュであろうか」。三浦は「毅然たる語調」で「キツパリと言いつつ」た（⑤253頁）。九年間のドイツ留学は三浦にヨーロッパ歴史学界についての的確な見取り図を与えていたであろう。その三浦がウィーン大学の中世史家アルフォンス・ドープシュを、ヨーロッパ随一の歴史家と推したことで、上原

の留学先はもとより、研究分野（ドイツ中世史）までもが決まってしまうのである。それが意味するのは、次のことである。つまり上原は、それまで三浦の下で続けていた研究をヨーロッパでも継続して深めることを求めず、むしろそれと断絶しても、ドープシュのもとで「大学生に落ちぶれて……インキ壺を下げて通学する」ことを選んだ、ということである。実際上原は、ウィーン大学で、ドープシュ・ゼミナールの「初歩者過程」から初めたのである。それが三浦の意向でもあった。

なぜ上原は、そのような道を選んだのか。上記の河上によれば、留学制度の初期の頃は、帝国大学の教育は幼稚で、「卒業して大学院に入るという位の趣意で、いわば学問の仕上げをするために留学した」のだという。上原の年齢、大学卒業直後というタイミングを考えると、明治時代の留学生に先祖返りしたかのように見える。しかし上原は、明治の留学生と違って、そのような留学を自ら選んだのである。当時の多くの「在外研究員」のように、大学に籍だけ置いて（あるいは籍も置かないで）、自分の個人的関心に沿った読書に励むだけでも、「見聞ヲ広ムル」ことに努めるだけでも、何ら問題はなかったのである。にもかかわらず、彼がわざわざ「大学生に落ちぶれ」る道を選んだことには、当然、理由がなければならない。

考えうる一つは、ヨーロッパの学術への同一化の欲望、というものである。「大学生に落ちぶれ」ということは、それまで自分の中に積み上げてきたものをいったん

白紙に戻し、あたかも幼児がその成長とともに周囲の諸価値を身に染みこませて行くように、ヨーロッパの学術を身につけようとしたのではないか？ ドープシュの学問や、それが体現しているヨーロッパ近代歴史学を、「本場仕込み」で身につけ、ヨーロッパ水準の学者になりたいという欲望が、上原をして「大学生に落ちぶれ」ることを決意させたのではないか、ということである。事実、戦前戦中の上原の業績に対する高い評価は、彼が「ヨーロッパ水準」の研究を行ったというにあったのである。

しかし、上原が考えていたのは、全く別のことであった。彼は第一級のドイツ中世史家になるためにドープシュのもとに留学したのではなかった。それは、「三浦博士が私を『エブ』もつけないで送りつけた相手のドープシュ教授が、たまたま『ドイツ中世』を専攻してきた歴史家であった」(⑩ 279頁) からに過ぎない。上原の願いはこうであった。「私はドープシュ教授の業績そのものよりは、その人と学問とについてじっくり承知したかった。それと同時に、ドープシュの人と学問とをそのようなものとして存在させているヨーロッパの社会と文化、ヨーロッパの歴史と歴史学とは何かを突きとめたかった」(⑩ 279頁)。

ここに上原の留学の決定的な核心がある。ここで語られているのは、圧倒的な創造性を持つヨーロッパの学術への「同一化」の欲望ではない。むしろその逆の、「ヨーロッパへの問い」とでも言いうるものである。ヨーロッパの学術の成果に同一化するのでも、それをつまみ食いするのでもなく、

それを生み出した「人と学問」、すなわち社会的・生活的営為全体の結実として学問を捉え、それを突破口として「ヨーロッパの社会と文化、ヨーロッパの歴史と歴史学とは何かを突きとめ」ようとするのは、「ヨーロッパ」を内側から「対象化」し「客観化」することであり、「ヨーロッパ」という圧倒的な文化的迫力に対して、自己の知的主体性・自由を守り抜こうとする姿勢に他ならなかったのである。

彼が出発までの半年間の準備期間を、ドープシュの著書の読破に充てないで、法華三部経と浄土三部経、日蓮と親鸞の遺文の通読に用いたのは、「その当時、ヨーロッパ文化というものについて人並みにもっていたコンプレックスをなんとか清算して、いくらか粘着力のある主体性においてヨーロッパの文化と学問に接したい、と願った」(⑰ 273 頁) からだ、との回想は、まさにそのことを明かにする証言であろう。

しかし、上原はまだ日本にいる。ここまでのことは、あくまで留学に出発しようとする上原の姿勢、学問意識の話であって、彼はまだヨーロッパの学術に直接接してはいないし、その中で自分の知的主体性を守る具体的な手段も方法も手にしてはいないのである。

ドープシュ・ゼミナールの衝撃

これから上原の留学そのものの検討に入っていくが、まずは彼の留学の概略を一通りおさえておこう。

出発は1923年9月1日、横浜港からの予定であった。しかし、出航の二分前に発

生した関東大震災によって大幅に遅れ、10月17日神戸港からの出発となった。インド洋、スエズ運河を経て地中海に入り、11月27日マルセイユ着。ただちにウィーンに向うが、途中、偶然の事情から、ジェノヴァとヴェネツィアに二泊ずつすることになり、ヴェネツィアでは、「是れ位の壮観に接しうるのでなければ、妻子を残して幾千里、異境に来る甲斐はないと云ふものだ」との感慨を得た。

12月2日ウィーン着。11日に聴講料を支払ってウィーン大学哲学科の聴講生となり、翌12日にはドープシュ・ゼミナールへの参加料を支払って、「ゼミナール生」となる。そしてまず一般学生と同様、「ドイツ史の大体に通ぜしむることを目標」とする「初歩者過程」でドープシュの指導を受けることになった。こうしてめでたく「大学生に落ちぶれた」わけである。初歩者過程を1924年の夏学期までに終えて、24-25年の冬学期からは「正ゼミナールの演習に特に参加を許され」た。上原はこんなふうにと書きただけだが、後に触れるように、ドイツ大学における「ゼミナール」の位置づけは圧倒的に重く、「正式メンバー」になることは、日本人留学生としては稀有なことだった。

ゼミナールのメンバーは、共同演習に参加すると同時に、一人一人が専門的研究課題を与えられた。上原にはゾンバルトの近著の重要仮説の批判的検証が課され、そのために毎日のように国立図書館の手書本室に通って、全二十七巻の『フッガー時報』手書本を検討することになった。同学期に

はエネアス・シルヴィウス『フリードリッヒ三世伝』の文献批判をめざす共同演習に参加、続く25年の夏学期にはザルツブルグ大司教聖堂『寄進帳』を史料としたグルントヘルシャフトの共同演習にも参加した。この間、専門家による中世古文書の演習・講義にも参加した。そして25 - 26年の冬学期の始めまでには“Beiträge zum Studium der Fuggerzeitung”（後の「『フッガー時報』考」の原型）を書き上げ、ゼミナールで報告したのち、12月、冬学期の途中で帰国の途に就き、翌1926年2月に日本に帰着した。この間、長期の休みにはヨーロッパ各地への旅行を企て、「見聞ヲ広ムル」ことにも精を出していたことを付け加えておこう。

以上が、上原の二年間の留学の概略である。「大学生に落ちぶれ」た上原が、二年間という短期間にどれほど精励し、「ドイツ中世史家」としてどれほどの進歩を遂げたかがうかがえるであろう。しかし私たちにとって重要なことは、上原がいかにくぐれた「ドイツ中世史」の専門家になったかということではない。この二年間の留学経験が彼の学問意識にどのような変化をもたらしたか、そしてそれがどのような意味を持ったのか、ということこそが問題なのである。

上原はドープシュ・ゼミナールの最初の印象を次のように語っている。「教授のゼミナールには、『研究』ということに厳密に照準を定めた読書慣行というものが儼存しており、教授自身はもとより、すべてのゼミナール学生もそのことを当然のことと

して励行して」(⑰273頁)いた、と。

しかし、「『研究』ということに厳密に照準を定めた読書慣行」などというものは、研究者にとっては当たり前のことではなかろうか。自分の研究のために史料を読み、関連著作を参照することは、日本でも誰もがやっていることである。上原自身も三浦のもとで、「読書に方法があり、作法があること」を、すでに十分に学んでいたのではなかったか。にもかかわらず、ゼミナールの「ひたすら『研究』という実務に焦点づけられた読書」は、上原にとって「未知の、驚異的な、そして私を圧倒する状況として押しせまってきた」のである。何かが決定的に違っていた。それが何かを上原は明示的に語っていないが、推測する手掛かりはいくつかある。

その一つは、上原がドープシュから与えられた個人的研究課題である。ドープシュは上原に、日本では経済史の権威とされていたゾンバルトの『ユダヤ人と経済生活』中の重要な一つの仮説について、その当否の検討がゾンバルトにおいて不十分であると指摘し、上原にその検討を課題として与えたのである。このことは、すでに令名高い研究者の著作でも、その内容の当否は逐一検証されなければならないことを、上原に教えたであろう。これが、上原が目撃した、ゼミナールで実行されていた「『研究』という実務に焦点づけられた読書」の一つの側面だったと推測してよいのではないか。

もう一つは、その課題を果すために、上原が選んだ原史料『フッガー時報』という十六世紀の手書き新聞に対する上原の史料批判のプロセスである。ゾンバルトが叙述対象としたまさにその時代に書かれた同時代史料であるから、ゾンバルト仮説の検証に直ちに使えると思ったのは甘い見通しで、ノートを取りながら克明に読んでいくうちに、その記載をストレートに事実と見なすことはできないこと、その前に、まず「『フッガー時報』そのものの成立、その史料性格、それに載せられた諸記事の信憑性について確実な認識をもつべきであったことに気がついたのである」(17) 276頁)。もちろんこの問題については先行研究がある。つい数年前にも、クラインパウルによる「斬新な」研究書が刊行されたばかりであった。しかし上原は、その最新の研究をも、ウィーン国立図書館の原本に依拠して批判したうえで、自らの文献批判へと進んだのである。

「文献〔ゾンバルトの『ユダヤ人と経済生活』〕の「権威」を疑うことから出発して、有能な史料批判〔クラインパウルの新著〕の「権威」を疑う地点に立ちいたりえた」と上原自身が言うように、ここでも、ドープシュ・ゼミナールの読書慣行は貫徹されていた。学問においては「権威」は存在しない。いかなるテーゼも認識も、その根拠に対する厳正な検証をへて始めてその真実性が承認されるのでなければならない。このようなすべてのものへの「疑い」こそ、学問の出発点におかれるべきものであった。ドープシュがゼミナールの学生を

指導する際にしばしば発したとされる、「であるかもしれない。しかし、でなければならぬ理由は何？」(18) 422頁) という問いかけは、そのことを象徴的に示しているだろう。テキストから何らかの理解をひき出すことはむづかしいことではない(「であるかもしれない」)。しかしそれが唯一の、あるいは最も蓋然性の高い理解であることは検証されているのか？(「でなければならぬ理由は何?」)。検証がなされない限り、それは学問たりえないのである。

こうして上原にとっては、いかなる「図書・文献」も、それを読むということはそれを「疑う」ということであり、それを成り立たせている「基底としての史料を読むこと」を意味するものとなった。しかも「史料」にまで降り立っても、それで「疑い」が止むわけではない。「先人たちの史料研究に満足することなく、自分自身で史料の検討と批判を試みる必要がある」のである。「大学生に落ちぶれる」ことで、上原はそのような学問の作法、すなわち「認識成果獲得のための労苦にみちた技術者的作業」(17) 272頁)、あるいは「研究成果を挙げるという実利を追求しての一種の禁欲」(17) 274頁)を「体認」するにいたったのである。ここで私たちは、マックス・ウェーバーが『職業としての学問』(1920年)のなかで強調した「作業への禁欲」を想起してもよいだろう。それは決してウェーバー一人の考えではなく、むしろドイツ大学における一般的な学問作法であったのである。

ヨーロッパの学術成果を疑うことも、その真実性を自分で検証することもなく、そ

のまま「権威」と認めて、それに依拠して論をなすことが常態化していた当時の日本の西洋史研究者にとって、このような研究姿勢・研究方法がどれほど驚くべきものに映ったかは、想像するに余りある。「ドープシュ教授の前に立った」上原は、「日本で私が経験してきた読書とは一種の享楽に他ならなかった」こと、あるいは「読書とは、日本にいたときには、図書・文献を読むことを意味したにすぎなかった」ことを痛切に自覚し、自分が「いかに一人の『非研究者』に過ぎなかったか」（同前）を思い知って、打ちのめされたのである。

ここに上原の学問意識の大きな転回点を見出すことは、当然許されるであろう。そのことは、このウィーンでの経験が、日本での「懇切を極めた」三浦の指導との間に葛藤を生じたことを上原自身が自覚したことからも明かである。

「ウィーンでは先生とドープシュ教授との間に存する研究方法と学風との相違が頗る私をなやませた」（⑤ 253 頁）と、三浦死去（1947 年）に際して草した一文の中で上原は書いている。三浦に対する上原の敬愛の念は終生変らなかつたが、その学問については、後年になるほど客観的に見るようになり、最晩年の自伝的エッセイ「本を読む、切手を読む」の中では次のように言われている。「三浦博士の研究指導は、その講義の場合と同様に、……いわば学問的教養主義への傾斜を帯同したものだ、と見られよう。いずれにしても三浦博士のゼミナールでは、少なくとも私については、専門家的技術者としての『研究者』への育

成、『研究』という実務にかかわるものとしての読書の指導は行われなかったように思われる」（⑩ 272 頁、傍点原文）。これがドープシュの研究指導との対比を踏まえたものであることは明かであろう。ウィーンにおいて、上原は三浦の学問意識から決定的に離脱したのである。

ヨーロッパを「追試」する

では上原は、ドープシュ・ゼミナールにおいて、ついに自分の学問の確実な基盤、安住の地を見出したと確信しえたのだろうか。ある意味でそれはイエスであるが、ある意味ではノーである。イエスというのは、彼がドープシュのもとで会得した実証主義的歴史学の方法は、帰国から敗戦までの二十年間、中世史家の堀米庸三に「その余りに厳正なる学的態度に殆ど追随すべからざるを覚えた」とまで言わせた重厚な実証的論文をつぎつぎと生み出すことを可能にさせたからである。ノーというのは、しかし、そのような業績によって日本の学界のなかに「中世史家」としての確固たる地位を築くことが、上原の目的ではなかつたからである。上原のウィーンにおける学問意識の転回には、もう一つの側面があった。

たしかに上原は、ドープシュ・ゼミナールの「専門家的技術者としての『研究者』」になるための訓練を全面的に受け入れた。その実証主義的方法は理知的合理的で厳格を極めたものであり、歴史科学の普遍的基盤として揺るぎないものであった。それに則ればこそ、極東からやってきた若い学徒が、『フッガー時報』という十六世紀末か

ら十七世紀初頭の手書き新聞に対する厳密な史料批判を行うこともできたのである。にもかかわらず、上原には、ドーブシュおよび彼が体現したヨーロッパ近代歴史学への無条件の「帰依」は起こらなかった。堀米は「ドーブシュに心酔された上原氏」⁽⁵⁾と評したが、上原には「心酔」もなかった。そのことは彼が、ドーブシュ・ゼミナールの禁欲的な研究慣行に、圧倒されると同時に強い違和感を抱いたことに表れている。「ゼミナールでいっしょに勉強していた学生たちの様子を見ていると……その『研究』というものは、脈動しているものを固定化させ、連続しているものをばらばらにさせ、生命のあるものを死物化させるのに、一生懸命になって」(24 159 頁) いるように思えたという、上原の後年の回想がそれである。ヨーロッパの人文学の圧倒的な伝統とその創造性に直かに接したとき、その欠点をあげつらって、自己防衛のために日本帰りに立てこもる道にも、その創造性に心酔して代理主体として振舞う道にも陥らなかった上原は、恐らく珍しい事例であろう。

このような対応を可能にした要因として私たちが注目すべきは、彼が留学前から示していた知的主体性・自律性への強烈な意志である。それは、研究実践そのものから自ずと出てくるものとは思われない。むしろその背後にあって、彼の研究実践を支えている超学問的な衝動であったと言うべきであろう。

上原には、学問を意識し始めた「若いころから」、「『学問』や『研究』というものは、動いているものを静止させ、生きてい

るものを形骸化させ、具体的なものを抽象化させる機能をもつもの」ではないか、という「警戒心」があったという。ドーブシュ・ゼミナールの経験を逆投影したような表現だが、むしろ、ドーブシュのもとで、もともと抱いていたこの「学問」への警戒心が鮮明に自覚されたと考えるべきだろう。しかしその警戒心のさらに奥に、次のような意識があった。「認識としての『学問』の世界の外に、多分『学問』に優先するものとして、行為としての『倫理』の世界というものが儼存する」という意識、「『倫理』の世界そのもの、『宗教』の世界そのものは存在する」(24 161 頁) という意識を、彼は子どもの時から身につけていた、というのである。それは、日蓮宗の田中智学の熱烈な信者であった養父に宗門の教えを厳しく仕込まれた、という生い立ちに関係すると彼自身は理解していた。

しかし、倫理的世界あるいは宗教的世界が学問に優先して存在するという感覚は、より一般化して言えば、人間の生(生活)は学問に優先すると読み替えることが可能な普遍的な感覚である。理知的合理性に基づく学問がどれほど普遍的な分析力・説得力をもとうと、それで人間の生(生活)を汲み尽くすことはできない、という上原のこの直観こそ、彼をしてドーブシュの学問、ひいてはヨーロッパの学術の圧倒的な力に打ちのめされつつも、それに降伏することを妨げ、彼の生の欲求である知的主体性・知的自律性を守らしめた最大の要因であったと考えられるのである。

しかしそれは、生と学問とが相互排他的

であることを意味しない。「優先する」というのは、生（生活）が基盤となって、その上に学問が成り立つと考える点で、むしろ生（生活）と学問の切り離しえない密接な関係を示しているものでもあるからである。上原は後年、ドーブシュ・ゼミナールを明かに意識しつつ、次のように語っている。「研究課題の設定がひとたびなされた後では、その研究課題を追求するためのいわば技術的な研究方法が要請されるだろう。……〔それが〕どこまでも単に「技術的」というものでありうるか、それとも、それもまた生きてきた生活意識の裏づけなしにはとうてい存在しえないものではないのか……いずれにしても、生活現実をとらえ、研究課題を追求してゆくための技術的方法がヨーロッパの近代歴史学において発達してきたことは、一つの事実である。そしてこの方法について考察することは、少なくともヨーロッパの近代歴史学の性格や特徴を明らかにする上に、ぜひとも必要である」（『歴史学序説』32頁）と。ここでいう「技術的方法」が「認識成果獲得のための労苦にみちた技術者の作業」と重なることは明かであろう。それらがひとつひとつ積み重なってヨーロッパの壮大な学術体系が創り上げられているのであって、その基礎は、このような「労苦にみちた技術者の作業」とそれを裏づける「生きてきた生活意識」つまりは「倫理」によって成り立っていることを発見したのである。

ここに至って上原は、留学に際して強く念願していた、ドーブシュの「その人と学問」、さらに「ドーブシュの学問をそのよ

うなものとして存在させているヨーロッパの社会と文化、ヨーロッパの歴史と歴史学とは何かを突きとめ」るための、最も基本的で具体的な方法を手に入れたと言っただろう。それが、「ドーブシュその人が情熱を傾けて研究をつづけてきた、そのような「ドイツ中世」をドーブシュその人が探究してきたのと同じの方法をもって体験的にとらえる作業」、すなわち「認識成果獲得のための労苦にみちた技術者の作業」の実践、というものだったのである。

これが上原がウィーンで経験した学問意識の転回のもう一つの側面であった。

このような方法を、彼に明確に自覚させるにあたっては、『『フッガー時報』考』の制作が大きな役割を果たしたと思われる。彼は、『フッガー時報』の史料批判に没頭していた時の自己の心中を次のように語っている。「毎日のように国立図書館の手書本室に通って、全二十七巻の手書本を検討するような、愚直みたいな『研究』をやったけれども、それにはだいぶん茶目っ気が働いていたのであって、ヨーロッパ学者のやる『実証的研究』というものが、いったいどんな程度のものか、一つ洗ってやれ、といったひやかしがなかった、とは言えない。むき〔傍点原文〕になって『フッガー時報』を『研究』していたように見えるけれども、実際は、ヨーロッパ人のやっている『学問』などというものは、どんな調子や、意味合いのものか、それを彼等自身の手法によって捉えてみたい、というのが、本音だったようだ」（24 159 - 160 頁）と。

これはとくに肩の凝らない随筆として書

かれた一文なので、「茶目っ気」だの「ひやかし」だのと諧謔的な表現が使われているが、語られていることは重い認識である。すなわち、ドーブシュ・ゼミナールで習得した厳格な実証的方法の力を存分に振るった成果として、彼はこの史料批判を仕上げたわけだが（そして恐らくドーブシュもゼミナールの学生たちもそのように受け取ったであろうが）、その厳密に実証的な外形の内側には、ドーブシュたちの方法そのものを対象化し、その「権能」を問おうとする上原の主体的意志が働いていたことを、この一文は語っているのである。

これは、科学実験でいうところの「追試」に近い。「追試」とは自覚的な同一化であり、対象に対する方法的信頼と方法的懐疑とが同時に機能している点で、「模倣」とは正反対の、きわめて主体的・能動的な精神の働きである。その方法の再現を通してその問題点、不備、誤謬さえもがあらわになる点で、「追試」は対象の乗り超えをも含意していると言ってよい。上原はドーブシュの学問の根幹をなす方法に則ってその有効性を「追試」した。そしてそれによって、ドーブシュに体现されたヨーロッパ近代歴史学をも「追試」しようとした、ということである。ヨーロッパの大学や学問伝統に相当するものの全くない日本で、ヨーロッパの近代歴史学の「主体的な消化」(17) 276 頁)を行おうとすれば、これ以外のどんな方法が考えられだろうか。

しかも科学実験における「追試」は、同一の結果に到達すればそれで終わりだが、歴史学の場合はそれほど簡単ではない。「追

試」によってドーブシュの人と学問だけでなく、それを突破口として、ヨーロッパの社会と文化、歴史と歴史学までを突きとめようとするれば、一度や二度の「追試」で済むはずもない。二年間の留学ではとうてい足りないのである。そのために、上原は「日本に帰ってからも〔追試の作業を〕つづける他はあるまい、と考えた」(17) 279 頁)のである。実際彼は、帰国してから敗戦までの二十年間、その作業をひたすら続けた。堀米を驚嘆させた上原の戦前の専門的業績は、業績たらんとしたものというよりは、そのような「追試」の作業のその都度の報告であったと捉えるべきものであろう。

ゼミナールの「継続」——敗戦まで

1926年2月、上原は二年余の留学を終えて帰国した。4月には新設間もない高岡高等商業学校（現富山大学）に赴任し、そこで二年間過したあと、母校の東京商科大学に転任し、商学専門部教授となった（1928年）。

高岡高商時代の学事については、詳らかにする準備がないが、「徳川時代大坂株仲間考」をドイツ語で草したことが確認されており（17) 280 頁）、また高岡高商赴任が機縁となって、後に述べる『富山売薬業史史料集』の編纂責任者を依頼されたことなどからすると、あるいは日本の商業史を講じていたのかもしれない。

その間も、ヨーロッパ近代歴史学の「追試」の作業は続けられていた。それは、東京商大に転任したその年に、「『フッガー時報』考」をみずから邦訳・補修して完成論

文としたことや、翌年には「クロスターノイブルグ修道院のグルントヘルシャフト」なる重厚にして長大な実証論文を発表したことなどからも明かである。

以後、1930年代から1945年の敗戦まで、「画も見ず、音楽も聞かず、文学作品も読まぬ学究生活に自分で自分を閉じこめて」(⑨53頁)、『ドイツ中世』をドーブシュその人が探究してきたのと同じの方法をもって体験的にとらえる作業』を継続していった。その作業への集中がどれほど熾烈なものであったかは、『独逸中世史研究』(1942年刊)と『独逸中世の社会と経済』(1948年刊)という二冊の公刊書に収められた論文だけでも、30年代の10年間に発表されたものが10本あり、いずれも根本史料を素材にした詳密な実証的論文であって、作成には相当の時間と労力を必要とするものばかりであったことから、想像することができる⁶⁾。

論文の作成以外にも「追試」の作業は行われた。1930年から作業が始まり、1935年に刊行された『高岡高等商業学校編『富山売薬業史史料集』』(全三冊)という史料集の編纂がそれである。上原は高岡高商より編纂を依頼されたのを機に、それをドイツの規範的史料集である『モヌメンタ・ゲルマニアイ・ヒストリカ』に徹底的に倣って編纂することを企てた。完成したそれは、「編纂の方法及び版行の形式が従来のものとは異るといふ点でも、注目せられていいと思ふ」、あるいは「本邦における史料編纂及び出版の水準を一段高めるだけの試はなされた筈だ」(『史心抄』41頁)と、上原

には珍しい自負の言を連ねるほどの労作であった。その背後には、「独逸で出版せられた刊本史料を利用した経験のある者」からすると、日本の刊本史料がその「史料編纂の方針と版行の方法とに関して……著しく見劣りするといふ事実」、「此の方面〔史料編纂に象徴される学問意識のあり方〕においては彼我の間に著しい径庭が存する」という事実、に対する痛切な自覚があったのである。

『モヌメンタ』に倣うと言っても、およそ伝統も経験もない日本で、三巻とはいえその方針を貫くことは、どれほどの「労苦にみちた技術者的作業」を必要としたかは、想像に余りある。「模倣」であれば、日本の実情に合わせて、及ばぬところは省略したり改変すればよい。しかし「追試」であるかぎりには、一点一画の省略も改変も許されないであろう。そのとき初めて、「彼我の径庭」が、たんなる量の問題ではなく、学界やそれを支える社会のあり方までも含めた質の問題でもあることが自覚されるのである。

しかし、上原は孤独であった。「彼我の径庭」をたんなる量の問題と考え、産業や技術と同様、いずれ追いつくと誰もが考えているような状況では、「模倣」と「追試」の違いに注意する人もいなければ、日本の「研究伝統の薄少なる」ことや、「学問的努力に対する社会的関心の豊かならざる」ことを、上原とともに憂える研究者も極少であったからである。また彼は、「西洋古代及中世経済史」を志す学生に対して、ギリシア・ラテン古典二語はもとより、中世諸

語の知識、史料学・古文書学の学修、さらに膨大な海外文献の消化さえも要求し、それを実行できない者は学問を断念せよとまで述べた⁽⁷⁾。それは教授と学生はともに「真理」を目指す同行者だとするドイツ大学理念を踏まえてのことであったが、日本の大学生には非現実的としか思えないこのような要求を突きつけることの中にも、彼の「孤絶」の意識が感じとれるように思うのは、うがち過ぎであろうか。

「世界史的考察の新課題」—三つの世界史

しかし、時流からまったく隔絶して、ドイツ中世史の実証的研究に没頭していたかに見える上原も、1940年代に入って日本が急激に戦争体制にのめり込んでいくと、時勢に無関係でいることはできなくなる。東京商科大学教授という公的立場が彼に時代への発言を要求することがあれば、彼はそれをあえて拒むことはしなかったように思われる⁽⁸⁾。ここでは、それらのなかで、太平洋戦争勃発直後の1942年の初めに、彼が『統制経済』という雑誌の三月号に発表した、「世界史的考察の新課題」という論文にのみ触れることにする。というのは、上原の戦中における学問と政治（戦争）とのかかわりをとらえることが本稿の目的ではないからである。「世界史的考察の新課題」は、以下に検討するように、単なる時事的発言ではなく、彼の学問意識にとっても特別な意味を持つものと思われるので、ここで取り上げるのである。

『統制経済』という雑誌は、商大の法学

者常盤敏太が編集兼発行責任者となり、東京「商科大学一橋講堂内」に置かれた「統制経済編輯所」において編修・発行されていたものである。1940年9月に創刊され、1944年4月まで刊行された。商大の正式の機関誌ではないが、創刊号の巻頭に、学長高瀬荘太郎が「創刊に序す」を寄せるなど、半ば公認の扱いであった。執筆者は大学の内外にわたっているが、当然、商大教授たちもしばしば寄稿を求められている。上原にもこの時依頼がなされたものであろう。

この論文は、誤って「大東亜戦争の世界史的意義」というタイトルで紹介されたが⁽⁹⁾、正しくは「世界史的考察の新課題」である。一読すれば、「大東亜戦争の世界史的意義」を高唱したものでないことは直ちに了解される。ではなぜ、このような「誤認」が生じたのか。本筋から外れるが、それについて一言触れておきたい。

それは本文のタイトルページの体裁に原因がある。上原がつけたタイトルの前に、その数倍のスペースをとって、太い罫線囲みの書き文字で「大東亜戦争の世界史的意義」と特筆大書されており、「世界史的考察の新課題」という上原自身のタイトルがあたかも副題にしか見えないようにレイアウトされているのである。雑誌の目次にはもちろん上原の付けた「世界史的考察の新課題」としか記されていない。

これは思うに、編集部への依頼は、真珠湾攻撃の「大戦果」に酔い痴れた国民的心理の中で、「大東亜戦争」の「世界史的意義」を高らかに論じてほしいというものであったのだろう。そこには、同年一月号の『中

『中央公論』が掲載した、高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高による座談会「世界史的立場と日本」で、日本が今や世界史的存在になったと謳いあげて、読書界の大喝采を浴びていたことが意識されていたであろう。この時期の「世界史」という言葉には、一般的な了解として、「日本が主導的勢力として作り上げつつある新しい世界史」という、「歴史哲学」的な意味が込められていたことに注意しておく必要がある。

しかし上原から来た原稿は、およそそのような氣勢の上がるものではなかった。彼の言う「世界史」はヨーロッパ歴史学で言うところのそれであって、「世界史の哲学」的な意味合いはまったくなかった。案に相違した編集部は、苦肉の策として、上原の論文の頭に、論文とは無関係に、「大東亜戦争の世界史的意義」と特筆大書して、本文をちゃんと読まない読者が「誤認」するように仕組んだのではないだろうか。

これは突飛な臆断であろうか。必ずしもそうでないことは、現にこの論文を「大東亜戦争の世界史的意義」と「誤認」した研究者がいることで証されているのではあるまいか。

さて、重要なのはもちろんその内容である。

この論文で上原が提示した論点は三つある。第一は、「大東亜戦争の世界史的意義」を論じてほしいという編集部の要請への答えに当る部分である。

上原は冒頭で端的に次のように述べる。「事象進展のさなかにあつて事象の全き意

味を把握することは容易でなく、……事象の客観的理解は事象完結の後に始めて行はれうべく、行為の全面的評価は行為の終了をまつて始めて可能とせられるわけのものであらう」(『統制経済』2頁、以下誌名省略)。今起こりつつある事件の真只中で、その意味を把握することは極めて難しい、それは事件が終ってからでなければ確定できない、というのである。しかも戦争目的や戦争の意義については、「英米等勢力の駆逐、大東亜共栄圏の確立、世界新秩序の建設」(3頁)が政府によって掲げられ、国民も広く支持しているではないか。こう言って上原は、編集部の要請に直接応えるのではなく、むしろそれを以下のように読みかえようとするのである。

彼は大東亜戦争に対する全国民的支持にもかかわらず、なお「別種の問題が別個の平面に存する」ことを指摘する。それは、大東亜戦争を、「意志内容を直ちに意義として理解する」ような「主意的把握」ではなく、「人類生活の世界史的展開における事象的性格の側で把握する」ことであり、それこそが「大東亜戦争そのものにより我国学界に対して新しく提起せられたもの」だ、というのである。「事象的性格」とは事象の客観的性格と言いかえることができる。すなわち今の日本には、「大東亜戦争」について主意的・主観的言説が溢れかえっているばかりで、それを歴史的・客観的に把握することに欠けている、それを実行することこそが日本の歴史学界に求められていることだ、というわけである。

しかしそのためには、「人類生活の世界

史的展開をいかなる構造のもの、いかなる内容のもの、いかなる意味のものとして理解するかといふ世界史学の一般的方法を問ふ」という作業を避けることができない。しかも、「歴史考究の実際に従事してゐるもの〔つまり実証的歴史学者〕としては、かやうの、方法を問ふ問題の場合にも、直ちにそれを歴史哲学的概念構成の問題として取上げること」は避けなければならない（ここに、このエッセイ執筆中に発表された『中央公論』の座談会「世界史的立場と日本」への批判が込められていることは明かである）。なすべきことは、まず「世界史的考察と世界史記述との歴史そのものを顧み」ることであり（洋の東西、古代から近代までの文献消化、何と膨大な作業であることか！）、その「結果を参照しつつ史的素材を現実消化しうる立場を経験的に手探り求めるといふ迂遠な手段」を取ることであり、これが「実証史家」としての唯一の答えだ、というのである（4頁）。「大東亜戦争の世界史的意義」はなにかということが問題なのではなく、「大東亜戦争」を世界史的に考察するとどうなるか、ということこそが問題なのだ、問題そのものを読み替えているわけである。

第二の論点は、上記のような世界史学の一般的方法を確立した後に「世界史的意義」に及ぶことが学問の歩むべき「大道」ではあるが、今日そのような余裕はないので、「便法」として、世界史的考察の一般的方法として予想される三つの類型を提示しよう、という部分である。

第一の類型は、「世界史的展開の主体を直

ちに人類そのものと観、人類そのものが常に一体的全体を構成しつつ一の共通目標に向って進展するもの」、「最初に人類の発生を叙し、次いで石器時代、銅器時代、鉄器時代へと人類が共通の時代を形作りつつ」（6頁）文明が進展してゆくとするもので、今日もなお主流的な世界史記述の方法である。のちに上原によって「人類史」と呼ばれるものである（人類史的世界史）。これは「一見極めて客観的な世界史記述」であるようにみえるが、キリスト教的発想を下敷きにしている点、暗黙の裡にヨーロッパ人を人類の代表と考えている点が難点である。

第二の類型は、人類を主体とするのではなく、「世界史経過の全体をばそれぞれ発展の自界完了性をもつ諸国民史に分解し、それら諸国民史の総計として全世界史を観念する方法である」（8頁）。しかしこれは、諸民族の境界が現実には見分けがたい点、諸民族が一様な発展をたどると前提する点に難点がある。

第三の類型は、「この大戦争そのものを出発点としてレトロスペクティブに世界史経過の全体を把握せんとする方法」、つまり出発点として特定の政治的事件を置き、それに関わる限りでの世界史的連関を把握しようとする方法である。これを私たちは「現代史的世界史」と言っておこう。世界史の一般的方法の一つとしてこの類型を抽出したことは、上原の独創であり、戦後の彼の世界史論に直結するものとして重要である。しかしこの方法にも難点がある。出発点となる事件や、世界史像のなかに選

び取られる事象の偶然性・他律性である。

この論文の第三の論点は、上記の第三の類型（現代史的世界史）に焦点を絞って、その難点を克服する方法についての考察である。喫緊の課題として「大東亜戦争の世界史的意義」を扱わねばならないとしたら、この第三の類型によるしかないのだが、その場合、偶然性と他律性というこの類型の難点をいかに克服するかが問題となる。しかし、すでに「大東亜戦争への実際的参与の意志」があり、また「国民感情の昂揚を自ら体験する限り」、このような学問的難点へのこだわりは「贅沢」であり、「押しつぶ」すべきだと考えるのが今日一般の風潮であろう。しかし上原は、「対象の選定、問題の採択は、もとより出発点の偶然性を必然化し、他律性を自律化する方向で行はれねばならぬ」（11頁）として、時代の風潮に投じて非学問的あるいは超学問的な世界史の主張に走ることを拒絶するのである。

では、出発点の他律性、選ばれる事象の偶然性を克服するためには何が必要か。それは一つには、今日に至るまでの日本歴史の全趨勢の、二つには、日本が敵対しているところのヨーロッパの歴史の、今日にいたるまでの全趨勢の、第三には日本が大東亜共栄圏のもとに包摂しようとしている諸民族の歴史の今日までの全趨勢の、それぞれの把握が前提となる、と主張する。詳細については省略するが、ここで重要なことは、実際の歴史的事件を出発点として世界史を再構成するという「便法」でさえ、それを学問的に処理しようとするかぎり、膨

大な作業が必要となる、ということである。

以上の検討から、この論文の主題が、「大東亜戦争の世界史的意義」を主張することにあつたのではなく、「大東亜戦争」を世界史的に考察することにあつた、という私たちの仮説は実証されたと考えてよいだろう（上原が「世界政策の会」で行った報告が「大東亜戦争の歴史的 성격」と題されていたこともここで想起したい。注6参照）。

いや、むしろ「大東亜戦争」は、上原が世界史の方法を模索するためのひとつの契機であつた、と言ってもいいかもしれない。確かに上原は、師の三浦新七の比較国民性論を中核とした文明史を通して、また師の師であるランプレヒトの普遍史への強い志向性を通して、「世界史」という問題に深い関心を抱いていた。しかし、世界史の具体的方法について自ら思いを巡らし、またその一般的方法確立のための試案を提示するようなことは、それまでなかったと思われる。その意味では、「大東亜戦争」は、上原にとって「世界史」について本格的に考察する契機を与えたと言えるのではあるまいか。まして京都の哲学者たちが、主意的・主観的な「世界史の哲学」を振り回して、ヨーロッパ中心主義的世界史の克服を叫んでいるのを見るとき、ヨーロッパが創造した実証主義的歴史科学の「労苦にみちた技術者の作業」を踏まえた「世界史の方法」を対置することは、必須の作業と思われたであろう。

すでに述べたように、「世界史的考察の一般的方法」の第三の類型（現代史的世界

史)はとくに注目に値するものである。この時点はまだ三つのタイプのなかで特別の地位を与えられておらず、また他の二類型に劣らぬ膨大な文献消化と実証作業を必要とするものとして提示されているにとどまるが、戦後には、この類型がほとんど唯一の世界史の方法として重視されるようになり、その意味付けも大きく変化する。それは上原の学問意識が、戦後においてもう一度大きく転回したことを示すものである。

「追試」の作業に自己を閉じ込めて、ヨーロッパ的学問からの自律と自由の獲得を目指すというのは、誰もまねできない修行にも似た禁欲を自己に課した点で、「エリート主義」的な学問意識であったと言わざるをえない。いわば「出家」の学問である。それは一般の人々の畏敬の対象とはなりえても、同時に孤立を免れることもできないであろう。戦後の上原は、そのような「出家」の学問意識から、いわば「在家」の学問意識へと大きく転回を遂げるのだが、それを象徴するのが、50年代前半に提起された「世界史像の自主的形成」という、ここで述べた第三の類型の発展形であった。そしてその延長上に、禁欲とはおよそ正反対に見える「落書き的論文」のすすめのような乱暴極まりない学問意識も出てくるのである。

註

- (1) 三浦新七の事績については『東西文明史論考』(岩波書店、1950年)による。
- (2) 『上原専禄著作集』第18巻19頁を示す。以下、著作集からの引用出典はこの形式で本文中に挿入する。網羅的ではなく、主な個所にとどめた。
- (3) 以下の留学生に関する記述は、辻直人「二十世紀初頭における文部省留学生の派遣実態とその変

化についての一考察」(『東京大学史』26、2008年)による。

- (4) 以下、引用文中の傍点は、注記しない限りすべて引用者による。
- (5) 堀米庸三「本会顧問山中謙二先生を偲ぶ」『史学雑誌』1974年4号)91頁。
- (6) 上原には、戦前にもう一冊、『独逸近代歴史学研究』(1944年刊)という著作があるが、収録されているのは19世紀から20世紀にかけてのドイツ歴史学の主要業績・研究動向についての史学史的論考なので、いわゆる実証論文には数えていない。しかしそれらは、「追試」を主観的なものに終わらせないために必要であり、両者は深い関係にあった。
- (7) 東京商科大学一橋新聞部編『経済学研究の葉 改訂版』(三省堂、1940年)。
- (8) 以下に検討する『世界史的考察の新課題』執筆のほかにも、1942年の『中央公論』12月号において、「教育と軍務と世務」という座談会に参加し(上原以外の出席者は、大熊信行、板垣與一、酒枝義旗)、また翌年43年の2月には、太平洋協会の中に鶴見祐輔によって組織された「世界政策の会」で「大東亜戦争の歴史的な性格」という報告を行なったという記録が残っている(『矢部貞治日記 銀杏の巻』1974年、読売新聞社)。
- (9) 中野敏男『大塚久雄と丸山眞男——動員、主体、戦争責任』(青土社、2001年)63頁。